魚朝恩と仏教

博士後期課程一年　藤原　敦

一、はじめに

魚朝恩（七二二～七七〇）は中国唐代に活躍した宦官で、代宗（在位：七六二～七七九）の治世下に絶大な権勢を誇り、その観軍容使という官職から「魚軍容」とも呼ばれた人物である。

魚朝恩については、これまで高力士や李輔国など権勢を誇った宦官の一人として(1)、或いは熱心に仏教を支援した王縉や元載などの篤信家の一人として(2)副次的に紹介されているにすぎなかった。

しかし、魚朝恩は不空訳『仁王護国般若波羅蜜多経』（以下、『仁王経』）の訳経使を務めているほか(3)、粛宗・代宗の国師を務めた南陽慧忠とも問答を行っているなど(4)、両唐書の伝に記載されている章敬寺の建立のほかにも、様々な仏教と関係する事蹟が見られ、副次的に扱って良いような人物ではないことが推測される。

そこで、本論ではこれまで副次的に取り扱われてきた魚朝恩を中心に据え、彼の宦官としての生涯を踏まえた上で改めて仏教との関係を考察するものである。

二、魚朝恩の生涯

魚朝恩については『旧唐書』巻一八四、『新唐書』巻二〇七に伝がある。

それによれば、出身地は瀘州瀘川県（四川省東南部）で、開元一〇年（七二二）に誕生。天宝年間（七四二～七五五）の末に宦官として後宮へ仕官。至徳元年(5)（七五六）に李光進軍の監軍となる。翌二年に粛宗が長安を奪還すると、三宮検責使、左監門衛将軍、知内侍省事となる。乾元元年（七五八）に郭子儀ら九節度使が安慶緒を相州（河南省安陽）で包囲した際に、観軍容使・宣慰使・処置使として諸軍を監督した。翌二年に史思明によって洛陽が陥落すると、元は隴右節度使哥舒翰の支配下にあった神策軍(6)を率いて陝

州（洛陽と長安の中間）に駐屯してこれに備え、洛陽奪還後に開府儀同三司、馮翊郡公となった。広徳元年（七六三）には吐蕃によって長安を逐われた代宗を華陰で迎え、天下観軍容使・宣慰使・処置使となった。代宗の長安帰還後の永泰元年（七六五）にはその功績によって判国子監・鴻臚使・礼賓使・内飛龍使・閑廏使、鄭国公となった。大暦二年（七六七）には章敬寺を建立し、翌三年には内侍監、韓国公となった。

しかしながら、その功績を誇り、権勢(7)を恣にして宰相の元載、王縉を譏った事から讒言され、大暦五年（七七〇）の寒食節に秘密裏に処刑された。

以上の経歴をかいつまんでみるに、三〇歳前後で宦官となり、以降順調にキャリアを重ね、七六三年（四二歳）から権勢を握り、七七〇年（四九歳）に処刑されるまでの非常に短い生涯であったことが分かる。この非常に短い生涯に、彼は後の仏教界に影響を及ぼすような様々な仏教関係の事蹟を起こしているのである。

三、良賁との交流

以降、魚朝恩と仏教との関係について、年代順に考察を行う。

魚朝恩が、いつ、どのような経緯で仏教を信仰するようになったのかは明らかではないが、現時点で確認されるもので最も早いものは、乾元二年（七五九）の魚朝恩の陝州駐留時代に始まった、法相宗の僧、良賁との交流である。

良賁（七一七～七七七）は、『大唐貞元続開元釈教録』(8)によれば陝州虞邑の出身で(9)俗姓は郭氏、天宝八年（七四九）に出家。その後代宗の菩薩戒師、青龍寺の寺主として不空の『仁王経』翻訳に参加し、『仁王護国般若波羅蜜多経疏』や『凡聖界地章』を執筆。しかしその後、大暦六年（七七一）に集州（四川省）開元寺に左遷され、その地で病没したという経歴の僧であり、これまでは不空門下の密教僧として扱われていた。

しかし、空海が『十住心論』で盛んに引用する『凡聖界地章』の翻刻研究(10)に参加している山口史恭氏の研究(11)によると、良賁は不空門下の密教僧ではなく、全く別の関係から『仁王経』の翻訳に参加したと言う。

以下に山口氏の研究を基に魚朝恩と良賁との関係を年代順に追うと、陝州出身で地元の寺院で得度、修行していた良賁を陝州に駐留した魚朝恩が見出す。両者は意気投合し、広徳元年の代宗の長安帰還にも同道。翌二年には魚朝恩の依頼で『凡聖界地章』を執筆(12)。大暦二年には章敬寺の落慶法要にて講師を執行(13)。大暦五年の魚朝恩の処刑直後に左遷となる。

以上の、他の僧侶との間にはない親密な関係から、永泰元年（七六五）の不空による『仁王経』翻訳の申請前は協力者の一人に過ぎなかった良賁が、訳経使となった魚朝恩によって参加僧侶の筆頭に位置付けられるようになったという山口氏の指摘は、妥当なものと思われる。また、良賁が代宗の菩薩戒師となったことも、魚朝恩の強い推薦によるものと思われる。なんとなれば、もし、良賁がこれまで言われてきたように不空の弟子の一人であるならば、師を差し置いて代宗の菩薩戒師となるはずがなく、また、魚朝恩の処刑直後に左遷されることもないからである。

ともすれば、一生を地方寺院の住職で終わるかもしれなかった良賁を見出し、長安の大寺院の一つである青龍寺の寺主、並びに皇帝の菩薩戒師にまで出世させ、また、日本の真言宗に影響を及ぼした『凡聖界地章』や『仁王護国般若波羅蜜多経疏』を執筆させ、良賁を仏教史の一コマに位置付けたのは、魚朝恩なのである。

四、慧忠との交流

前述したように、魚朝恩は粛宗、代宗二代の国師であり、長安では千福寺や光宅寺に住していた南陽慧忠（？～七七五）とも交流しており、『祖堂集』巻三「慧忠国師章」には[14]次の問答が収録されている[15]。

魚軍容問ふ「師白崖山に住する時如何修行す」師家の童子を喚ぶ。童子来たる。師乃ち手を以て童子の頭を摩して曰はく「惺惺として直に惺惺と言い、暦暦として直に暦暦と言ふ。以後人の謾を受くる莫れ」

この問答は長安に於いて行われたものと推測されるが、慧忠が粛宗に招聘されたのは上元二年（七六一）であるため、時期としては代宗の長安帰還後である広徳元年（七六三）から魚朝恩が処刑される大暦五年（七七〇）までの間であると推測される。また、「家童子」とあるので、宮中や寺院で行われたのではなく、魚朝恩の邸宅で行われたものと思われる。当時の魚朝恩が国師を自宅に招待することが出来るほどの権勢を誇っていたことが、この記述からも推測出来るのである。

五、『仁王経』の翻訳

また、魚朝恩は前述したように、永泰元年（七六五）に大明宮内道場で行われた不空による『仁王経』の翻訳事業を訳経使として統括している[16]。

『仁王経』の翻訳は山崎宏氏が既に指摘されているように[17]、その年の一一月に特進試鴻臚卿に任じられ、大広智

三蔵の称号を戴き、密教を更に布教せんとした不空にとって、朝廷との結びつきが強化された一つの事件であった。

しかし、魚朝恩がこの訳経以前に不空と交流した記録が現在のところ見当たらず、ためにどのような経緯で魚朝恩が本事業を統括するようになったのかが不明であった。

友永氏の研究によれば[18]、当時の訳経事業は通常、五品以上の文官が関わるものであり、宦官による訳経事業への参加は異例であるという。

にも関わらず、魚朝恩が本事業を統括しているのである。

友永氏は魚朝恩の軍事上の競争相手で、部下で訳経副使の駱奉仙と険悪な関係にあり、広徳二年に朝廷に叛旗を翻した元河北副元帥の僕固懐恩を調伏するために、代宗や魚朝恩が当時、大変な呪術僧として名声の高かった不空に期待した結果であるとの仮説を述べられているが、筆者は不空に対する朝廷の思惑はともかく、魚朝恩と不空の両者を結びつける人物として、李元琮の存在をここに提示したい。

李元琮（？～七七六）は、塚本善隆氏の研究によれば[19]、不空が「三蔵和上遺書」[20]で

俗弟子の功徳使李開府は吾に依りて法を受くること三十余年。勤労なること精誠にして、孝心は厚深たり。河西、南海を問道のために往来し、浄影の鴻臚を躬ら親しく供養す。瑜伽の五部を先ず以て之に授く。十七五身更に秘密を増す。吾銀道具五股金剛杵、三股独股鈴を並びに留めて開府に与えん。念を作して受持し速やかに悉地を証せん。院中の師僧と開府の往来検校すること、吾が日に在るが如し。務須らく安存上下和睦せよ。

と讃えているように、不空より五部灌頂を受け、功徳使を務めた在俗の有力な弟子で、藤善真澄氏の研究によれば[21]、宦官で魚朝恩の部下であり、『旧唐書』巻一五七の「郗士美伝」に

魚朝恩、牙将李琮[22]を署して両街功徳使と為す

とあるように、魚朝恩から功徳使に任じられている。

つまり、魚朝恩、不空の双方と親しく、後に功徳使として長安仏教と深い関係を持つことになる李元琮が、両者を結びつけ、この訳経事業へと繋げたのである。

このように、訳経までの経緯については諸説あるにせよ、魚朝恩は不空の翻訳事業を統括し、後世に護国経典として名高い『仁王経』を世に送り出すのである。

六、章敬寺の建立

さて、魚朝恩は前述したように、大暦二年（七六七）に

長安城北西の通化門外に章敬寺[23]を建立しているが、『旧唐書』巻一八五の伝には[24]次のように記されている。

大暦二年、朝恩は通化門外の賜荘を献じて寺と為し、以て章敬太后[25]の冥福に資するとし、仍ち請して章敬を以て名と為す。復た造を加興し、壮麗を窮極す。城中の材木を以て費を充たすに足らざるに、乃ち奏して曲江亭館、華清宮の観楼及び百司の行廨、将相の没官の宅[26]を壊して其の用に給す。土木之役は僅ど万億を逾ゆ[27]。

『旧唐書』や『新唐書』などの史書は、宦官嫌いで仏教嫌いの儒教官僚によって書かれているため、こうした仏教関係の逸話については、非難するために特に収録されていることが多いが[28]、章敬寺は特に壮大であったようである。

章敬寺については既に塚本氏が分析されている[29]。それによれば、大暦二年の七月に建立を上奏し、右にあるように多数の人員を動員したためか、早くも同年末か翌三年正月には完成したようであり、落慶法要には前述したように魚朝恩と親密な関係にある良賁が講師を務めた。

寺院の規模については、『長安志』によれば殿宇が四一三〇間、子院が四八院あったと言う。これは、玄奘の慈恩寺が一八九七間、子院十余院であった[30]ことを考えると、非常に広大であったことが伺える。

また、章敬寺はその創建の経緯から、創建当初から朝廷から重要寺院として位置付けられている。

まず、完成直後の大暦三年の正月には代宗が訪れて僧侶一〇〇〇人を出家させているほか、同年七月には盂蘭盆会を行い、以降それを恒例行事としている。

大暦五年の、開基である魚朝恩の処刑後も、その地位に変化はなく、貞元二年（七八六）の二月には代宗の後を継いだ徳宗が訪問して、道澄（？～八〇三）より菩薩戒を受けているほか[31]、同五年（七八九）にも再訪して道澄に修心の法門を尋ね、后妃に菩薩戒を受けさせており[32]、更に同七年（七九一）には皇太子や群臣と共に訪問し、寺壁に詩を書いているなど[33]、皇帝が章敬寺に関わる数々の事例を見出すことが出来る。

このように朝廷の絶大な信頼を得ていた章敬寺には、実に様々な僧侶が滞在していた。

まず、完成直後の大暦三年には代宗によって招聘された牛頭宗の径山国一大師法欽（七一四～七九二）[34]、朔方より帰還した朔方管内教授大徳弁才（七二三～七七八）が[35]入寺しているほか、後年には馬祖道一の弟子の章敬懐暉（七五四～八一五）[36]、『悟空入竺記』の悟空（七二九？～？）[37]、『大乗理趣六波羅蜜多経疏』の智通[38]、般若三蔵訳『華厳経』

の翻訳に参加した鑑霊[39]、『僉定四部律疏』の編纂に参加した希照[40]、浄土教の法照[41]などが住している。

また、章敬寺では、道教と仏教との方術比べも行われている。

『宋高僧伝』巻一七の「唐京師章信寺崇恵伝」[ママ]によれば[42]、大暦三年の九月二三日、太清宮の道士の史華が仏教側の代表者との方術比べを上奏し、これに径山法欽の弟子で章敬寺には完成直後から滞在していた崇恵が応じた。

> 遂に東明観の壇前に於いて刀を架けて梯と成す。史華登躙すること常に磴道するが如し。時に緇伍互相に顧望推排するも、且つ敢へて躙する者なし。恵之を聞き、開府魚朝恩に謁す。魚奏請して章信寺に於いて庭樹に梯す。横架の鋒刃、霜雪然の若し。高を増して百尺とし、東明之梯の極を低下と為す。時に朝廷の公貴市肆の居民、駢足摩肩して此の挙を観す。時に恵徒跣して下層を登級すること、坦路に有るが如くにて曾つ色に難なし。復た烈火を蹈し、油湯を手探す。仍ち鉄葉を餐すること号を飫飩と為す。或ひは釘線を嚼すること声脆飴の猶し。史華怯懼慚惶し袂を掩ひて退く。時に衆弾指歎嗟すること、声雷響の若し。

このように、見事勝利して仏教の面目を保った崇恵は、朝廷より鴻臚卿、護国三蔵に任じられている[43]。

以上のことから、章敬寺は当時、帝都長安に於ける仏教の一大拠点として、僧俗を問わず認識されていたほか、魚朝恩が仏教の有力な外護者として僧侶から認識されていたことが伺える。

七、功徳使との関係

ところで、唐末の仏教政策を考慮する上で欠かせない役職として功徳使がある。

功徳使については、既に諸先人によって様々な研究が為されている[44]。

それによれば、功徳使とは朝廷による寺院の建立、経典の翻訳、僧侶の供養などの修功徳事業を統括した役職である。恒久的なものとして、宮中での事業を統括した内功徳使、長安での事業を統括した外功徳使[45]があり、これらには宦官、軍人が任命されていた。その他、寺院の整備、法要の執行など個々の事業を統括した非常置のものとして[46]僧侶が任命された[47]修功徳使がある。

内外功徳使の変遷について見てみると、現時点までに確認されている内外功徳使の史資料での最も早い登場は、大暦九年（七七四）五月付の不空の「三蔵和上遺書」[48]に見られる、先述した俗弟子功徳使李開府こと李元琮である。

彼は大暦一一年（七七六）に亡くなるまで京城寺観修功徳使の任にあり、その死後、不空の後継者である恵朗より功徳使の後任任命が上奏され(49)、大暦一三年（七七八）には鎮軍大将軍の劉崇訓が京城寺観修功徳使として『僉定四部律疏』の編纂事業を統括している(50)。

しかし、その直後の大暦一四年（七七九）に代宗が崩御し、徳宗に代替わりすると、先代の仏教偏重政策を忌避した徳宗の意向を受けて劉崇訓が功徳使の停止を上奏し、許可された(51)。

その後の数年間、功徳使の名は史資料に見られない。そして九年後の貞元四年（七八八）、その理由については諸説あるものの(52)、再び功徳使が置かれ、西（右）街功徳使として宦官の王希遷の名が(53)、翌五年には左街功徳使として寶文場の名が見られる(54)。

なお、『新唐書』巻四八「百官三」崇玄署の項に、

貞元四年、崇玄館は大学士を罷め、後に復た左右街功徳使、東都功徳使、修功徳使を置き、僧尼の籍及び功役を総ぶ。

とあるように、この年に功徳使制度が拡大して京城寺観功徳使が両街に分かれ、更に東都にも置かれるようになったほか、それまでは祠部の管轄であった僧尼の戸籍管理も移管された。

また、貞元一四年（七九八）には、般若三蔵による『華厳経』の翻訳事業が行われ、その統括者として霍仙鳴、寶文場の両功徳使の名が見られるが(55)、この際の霍仙鳴の肩書が「右神策軍護軍中尉兼右街功徳使元従興元元従雲麾将軍右監門衛将軍知内侍省事上柱国交城県開国男」であり、寶文場の肩書も「左神策軍護軍中尉兼左街功徳使元従興元元従驃騎大将軍行左監門衛大将軍知内侍省事上柱国邠国公」であり、両者とも功徳使と共に神策軍護軍中尉の官職を兼ねていたことが分かる。

この神策軍とは、先述したように、魚朝恩が統率し、後に禁軍に編入され、その中核部隊となった、元の隴右節度使哥舒翰の部隊であるが、『旧唐書』巻一八四の「寶文場・霍仙鳴伝」に

貞元一二年六月、特に護軍中尉両員、中護軍両員を立てて以て禁軍を帥せしむ。及び以て文場を左神策軍護軍中尉と為し、仙鳴を右神策軍護軍中尉と為す。

とあるように、貞元一二年に統率者として左右の両中尉が置かれ、左右街功徳使の職にあった両者が任命されている。

つまり、この時代は宗教政策の実務担当者を禁軍の統率

者が兼ねていたのである。

その後、元和二年（八〇七）には、『旧唐書』巻一四の「徳宗上」の元和二年二月辛酉の項に、

詔して僧尼道士全て左右街功徳使に隷せしむ

とあるように、僧侶のみならず、道士の戸籍まで管理するようになった。

そうした変遷を経て、唐末の宗教政策の実務を担当した内外功徳使であるが、先述したように、現時点でその存在が確認されているは大暦九年の李元琮であり、それ以前にいつ設置されたのかは、判明していない。

山崎氏は『旧唐書』巻一八四の「高力士伝」の記述や、高力士が仏教や道教を信仰し、宦官として禁軍を統括していたことから、実質的な功徳使であったのではないかと比定しているが[56]、高力士が功徳使の職名を付している記述は、現在のところ、発見されていない。また、高力士は上元元年（七六〇）に巫州へ流罪となっているため、それから大暦九年までの間、誰が修功徳事業を統括していたのかが不明であった。

ところが、先述したように、藤善氏の研究[57]によれば、『旧唐書』巻一五七の「郗士美伝」に「魚朝恩、牙将李琮を署して両街功徳使と為す」とあり、大暦五年に処刑される魚朝恩が大暦一一年に亡くなる李元琮を功徳使に任命していることが分かる。

つまり、李元琮は、魚朝恩が処刑される大暦五年以前から功徳使だったのであり、これまで確認されていた大暦九年よりも更に四年、その存在を遡ることが出来る。

また、同伝は更に、

琮暴横にして、銀台門に於いて京兆尹崔昭、純（崔昭の弟）を毀辱す。〔純、〕元載を詣で抗論す。以て国恥と為し、速やかな論奏を請ふも載従はず。遂に疾を以て辞し、東洛に退帰す。

と述べ、魚朝恩の部下である李元琮と、宰相元載の部下である[58]京兆尹の崔昭との仲が険悪であったことを示している。

これについて藤善氏は、京兆尹崔昭の任期が大暦三年五月から大暦四年一〇月までであったことを指摘している。

藤善氏はこの「郗士美伝」を引用した一連の論証を、塚本善隆氏が提唱した李琮・李元琮同一人物説の検証にのみ使用し、その他については指摘されない。

しかし、この論証は、李元琮を功徳使に任命した魚朝恩

が処刑される大暦五年以前から存在した功徳使の存在を、更に崔昭が京兆尹を辞す大暦四年に一年、遡らせることが出来るのである。

つまり、魚朝恩は李元琮を大暦四年以前に功徳使に任命しているのである。

この事実と、後の功徳使が禁軍の統率者である神策軍護軍中尉を兼任するという特徴と、これまで述べてきた彼の宦官、及び神策軍統率者として職歴と、『仁王経』翻訳、章敬寺建立など仏教に関係する業績とを合わせて考察すると、高力士が流罪となる上元元年から功徳使李元琮の名が確認される大暦四年までの修功徳事業統括者の空白期間の中で、李元琮に近いその数年間を、高力士同様、自身は功徳使の官職を冠してはいないものの、魚朝恩が実質的に担っていたと言えるのではないだろうか。

八、おわりに

以上、これまで副次的な人物として考えられてきた魚朝恩と仏教との関係について見てきたが、代宗の菩薩戒師で、空海が『十住心論』で引用する『凡聖界地章』を執筆した良賁を見出し、自邸で粛宗・代宗二帝の国師である南陽慧忠と問答し、後世に護国経典として名高い『仁王経』の翻訳事業を統括して世に送り出し、径山国一大師法欽や朔方管内教授大徳弁才、徳宗の菩薩戒師である道澄、浄土教の法照などが滞在し、当時の長安仏教の一大拠点であった大寺院章敬寺を建立し、経典の翻訳や論書の編纂、寺院の整備、僧尼の戸籍の管轄などの長安の仏教政策の実務を担当していた功徳使を任命、及び実質的に担っていたなど、後世の仏教に多大な影響を及ぼした業績を残していたことが判明した。やはり、魚朝恩は副次的に取り扱って良いような人物ではなかったのである。

仏教史研究に於いて、これまで副次的に取り扱われてきた人物は、何も魚朝恩だけとは限らない。例えば魚朝恩と同時代の人物であれば、本論に登場した元載や王縉などが挙げられる。

本論でその一例を示したように、複数の宗派史研究に於いて副次的に取り扱われている人物は、実は副次的ではなく、仏教史に於いて重要人物である可能性が高い。今後も、そうした人物を中心に据え、当時の仏教の状況を見ていきたいと思う。

また、本論は魚朝恩研究の嚆矢である。今後更に史資料の収攬、分析、考察を進めていきたい。

註

(1) 藤善真澄「宦官と仏教」（『隋唐時代の仏教と社会』藤善真澄著、白帝社、二〇〇四年）

(2) 塚本善隆「代宗・徳宗時代の長安仏教」（『唐中期の浄土教』塚本善隆著、法蔵館、一九七五年）

(3) 『仁王経』翻訳と魚朝恩との関係については、友永植氏の「不空訳『仁王護國般若波羅蜜多經』小考」（『別府大学紀要』三五号、別府大学会、一九九四年）に詳しい。

(4) 『祖堂集』巻三「慧忠国師章」（『景徳伝灯録』では巻五「西京光宅寺慧忠国師章」）に問答が見られる。

(5) 正確には「年」ではなく「載」であるが、本論では便宜上、「載」を全て「年」に統一した。

(6) 神策軍の変遷については、小畑龍雄「神策軍の成立」（『東洋史研究』一八―二号、東洋史学会、一九五九年）を参照のこと。

(7) 魚朝恩の当時の権勢については、顔真卿が「争坐位帖」でも触れている。なお、本情報は、安元剛氏のご指摘による。

(8) 良賁伝…『大唐貞元続開元釈教録』巻中（大正蔵五五、七五八頁b）

(9) 『宋高僧傳』巻五（大正蔵五五、七三五頁a）の良賁伝によれば、河中虞郷（山西省）の貴族階級の出身とするが、本論では最新の良賁研究である山口史恭氏の「良賁の生涯及び不空三蔵との関係について」（『豊山教学大会紀要』三二号、『智山学報』五三号、智山勧学会、二〇〇四年に同梱）に拠った。

(10) 『凡聖界地章』翻刻研究会「『凡聖界地章』翻刻研究(上)」（『大正大学綜合佛教研究所年報』二六号、大正大学綜合佛教研究所、二〇〇四年）

(11) 山口氏前掲論文による。

(12) 『凡聖界地章』の序に「此の図記は蓋し観軍容使開府魚朝恩に因りて之を製する所なり」とある。

(13) 『大唐貞元続開元釈教録』巻中（大正蔵五五、七五八頁c）に「章敬寺梵宇初成に属し、疏を執りて伏膺す」とある。

(14) 『景徳伝灯録』巻五「西京光宅寺慧忠国師章」に収録される問答も、内容は同一である。

(15) 『仏祖歴代通載』巻一四（大正蔵四九、六〇五頁b）には、慧忠との別の問答が収録されている。

代宗嘗て便殿に在り。天下観軍容使魚朝恩を指して忠に謂ひて曰はく「朝恩亦些子仏法を解す」朝恩即ち忠に問ふて曰はく「何者か是無明。無明何に従りて而して起つ」忠曰はく「仏法の衰相今現ず」帝曰はく「何也」忠曰はく「奴も也た仏法を解問す。豈衰相今現ずるに非ざるや」朝恩色をして大いに怒る。忠曰はく「即ち此の是無明。無明此れ従り起つ」朝恩復声を抗げて曰はく「人有り師に言ふ、今是仏を得るや」忠曰はく「朝廷に人有りて汝に言ふ、是は天子か果たして否か」朝恩地に伏して曰はく「死罪死罪、朝恩実に天子に非ず」忠曰はく、「我は是仏でなし。二尊並びて化さざるが所以に」朝恩曰はく「師長じて凡夫を作して成仏の時なきや」恩（忠の誤り）曰はく「我向後必當作仏。汝の姓什麼」朝恩曰はく「姓魚」忠曰はく「我向後作仏するに恵忠と名づけず。汝向後若し天子と作さば、姓を改却して姓を魚にせざることなきや」朝恩地に伏して曰はく「死罪死罪」朝恩此去実より敢へて師に仏法を論ぜず。

忠帝に謂ひて曰はく「幾帕にて此の奴を殺せん」

しかし、この問答はご覧の通り、「奴も也た仏法を解問す」などと、国師として招聘されるような高僧が言うはずがない差別的な内容であると共に、末尾にも「幾帕にて此の奴を殺せん」と言い、魚朝恩の絞殺を勧めているが、これは魚朝恩が秘密裏に絞殺されたことを歴史的事実として知る者しか言えない内容である。

また、『仏祖歴代通載』は、この問答が記載される大暦十年の項の前年である九年の項に、大暦三年に行われた崇恵の方術比べを記載しているほか、大暦六年の項には、粛宗が上元二年に招聘した慧忠を、この年に代宗が招聘したかのように記載するなど、誤りが甚だ多い。

よって、この問答は虚偽と見る。

(16) 友永氏前掲論文による。

(17) 山崎宏「不空三蔵」(『隋唐仏教史の研究』山崎宏著、法蔵館、一九六七年)

(18) 友永氏前掲論文による。

(19) 塚本善隆「唐中期以來の長安の功徳使」(『東方学報』四号、東方学会、一九三三年)

(20) 『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』巻三「三蔵和上遺書」(大正蔵五二、八四四頁b)

(21) 藤善真澄「不空教団の展開」(『中国の仏教と文化—鎌田茂雄博士還暦記念論集—』鎌田茂雄博士還暦記念論集刊行会編、大東出版、一九八八年)

(22) 藤善氏の研究によれば、李琮は李元琮のことであると言う。

(23) 『宋高僧伝』では章信寺と誤記されている箇所もある。それについては、塚本氏が「代宗・徳宗時代の長安仏教」(以下、略)や、『国訳一切経　史伝部一三』「宋高僧伝」巻一七の「唐京師章信寺崇恵伝」(一六頁、大東出版社、二〇〇四年)の脚注に於いて、章信寺は章敬寺の誤記であると指摘している通り、例えば『宋高僧伝』巻一五「唐京師西明寺円照伝」(大正蔵五〇、八〇五頁b)に「御題章信寺詩太子百寮奉和集三巻」とあるが、『大唐貞元続開元釈教録』巻中(大正蔵五五、七六六頁a)には「御題章敬寺詩太子百寮奉和詩集三巻」とあり、これに関する史実を記録した『旧唐書』巻一三「徳宗紀」の貞元二年秋七月癸酉の項にも「上章敬寺に幸ひし、詩九韻を賦す。皇太子と羣臣畢和し、之を寺壁に題す」とあることから、章信寺は章敬寺の誤記であることが分かる。また、『長安志』や『陝西通志』には章敬寺については記載されているが、章信寺については記載されていないことからも、誤記であることが分かる。

(24) 『新唐書』巻二〇七の伝にも、ほぼ同じ内容が記載されている。

(25) 章敬太后…粛宗の妃で代宗の生母。濮州濮陽の出身で姓は呉。父の罪により掖庭に入り、玄宗によって粛宗の後宮に入れられた。開元二八年(七四〇)に死去。代宗の即位後に皇后位を追贈された。(『旧唐書』巻五二、『新唐書』巻七七)

(26) 『唐会要』巻四八によれば、哥舒翰の邸宅であるとする。

(27) 『新唐書』巻一六五の「高郢伝」によれば、高郢がこの建立に対し、二度反対する上書を提出しているが、黙殺されている。

(28) 例えば『新唐書』巻一二六の「杜鴻漸伝」には、「病甚だし

きに、僧に頂髪を剔らしめ、遺命して浮圖の葬に依らしめ、封樹を為さず」とある。

(29) 塚本善隆「代宗・徳宗時代の長安仏教」（略）

(30) 『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻七（大正蔵五〇、二五八頁a）に記載。

(31) 『宋高僧伝』巻一六「唐京師章信寺道澄伝」（大正蔵五〇、八〇六頁b）

(32) 同右

(33) 『旧唐書』巻一三「徳宗紀」の前掲記述

(34) 塚本善隆「代宗・徳宗時代の長安仏教」（略）

(35) 『宋高僧伝』巻一六「唐朔方龍興寺弁才伝」（大正蔵五〇、八〇六頁a）に「大暦三載追入充章信寺大徳」とある。

(36) 『宋高僧伝』巻一〇「唐雍京章敬寺懐暉伝」（大正蔵五〇、七六五頁c）

(37) 『宋高僧伝』巻三「唐上都章敬寺悟空伝」（大正蔵五〇、七二二頁b）

(38) 『大唐貞元続開元釈教録』巻中（大正蔵五五、七六四頁b）に記載。

(39) 『貞元新定釈教目録』巻一七（大正蔵五五、八九五頁b）に記載。

(40) 『大唐貞元続開元釈教録』巻中（大正蔵五五、七六〇頁c）

(41) 塚本善隆「代宗・徳宗時代の長安仏教」（略）

(42) 『宋高僧伝』巻一七「唐京師章信寺崇恵伝」（大正蔵五〇、八一六頁c）。『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』巻六「登刀梯歌序頌謝表等三首」（大正蔵五二、八五六頁c）にもこの一連の模様は記載されている。

(43) 東寺の栄海作『滅罪講式』(http://www.f.waseda.jp/guelberg/koshiki/kdb/269/honkoku.htm、Niels Guelberg、講式データベース、二〇〇三年、二〇〇七年一月八日閲覧）には、「唐の大歴三年、道士史華京都章敬寺にて、仏法と験を争ふ時、崇恵禅師此の呪を誦し、火坑に入り、刀山を踏む。道士屈伏し而して去る。代宗皇帝法師に紫衣を賜ひ、鴻臚卿并びに護国三蔵の号を授く云云。弘法大師禅師の徳を嘆じて云はく、崇恵禅師催邪支傾すること云云。是れは仏頂神呪の験徳也」と、空海がこの件を讃えた旨が記載されている。

(44) 塚本善隆「唐中期以来の長安の功徳使」（略）、山崎宏「唐代に於ける僧尼所隷の問題」（『支那仏教史学』三―一号、支那仏教史学会、一九四一年）、室永芳三「唐長安の左右街功徳使と左右街功徳巡院」（『長崎大学教育学部社会科学論叢』三〇号、長崎大学教育学部、一九八一年）、藤善真澄「不空教団の展開」（略）、盧在性「唐徳宗と功徳使」（『東方宗教』七九号、日本道教学会、一九九二年）

(45) 別名に京城寺観修功徳使、左街功徳使、右街功徳使とも。

(46) 矢野主税「唐代宦官権勢獲得因由考」（『史学雑誌』六三―一〇号、史学会、一九五四年）によれば、「使」自体も元々令外の官であると言う。

(47) 任じられた僧侶として、大済（宮中を管轄）、廓清（同上）、簡較（同上）、恵暁（五台山を管轄）の名が見られる。

(48) 註（20）に同じ。

(49) 『代宗朝贈司空大弁正広智三蔵和上表制集』巻五「請続置功徳使表」（大正蔵五二、八五三頁b）

(50) 『大唐貞元続開元釈教録』巻中（大正蔵五五、七六〇頁b）

(51) 『大唐貞元続開元釈教録』巻中（大正蔵五五、七六一頁c）

(52) 塚本氏は社会の安定、財政の余裕によるものとし、盧氏は道士であった宰相李泌の勧めによるとし、藤善氏は『隋唐時代の仏教と社会』（略）の中で、度重なる政情不安の中、信仰にすがったとしている。

(53) 『大唐貞元続開元釈教録』巻中（大正蔵五五、七五六頁b）

(54) 『大唐貞元続開元釈教録』巻中（大正蔵五五、七六四頁b）

(55) 『貞元新定釈教目録』巻一七（大正蔵五五、八九五頁b）

(56) 山崎宏「唐代に於ける僧尼所隷の問題」（略）

(57) 藤善真澄「不空教団の展開」（略）

(58) 『旧唐書』巻一八四「魚朝恩伝」に「載其の便を伺い、之を巧みに中傷することを欲す。乃ち腹心の崔昭を用ひて京兆尹と為し、朝恩の出処を伺ふ」とある。

〈キーワード〉魚朝恩、長安仏教、功徳使